

特別展 林 不忘 三つのペンネームを持つ作家 図録テキスト

※このテキストは、平成4年(1992)に開催した鎌倉文学館特別展「林不忘 三つのペンネームを持つ作家」の図録から、文章を抜き出したものです。

※図録の販売は終了していますが、鎌倉文学館で閲覧することができます。遠方の方はコピーサービス(有料)も行っております。電話か問合せページよりお問合せください。

※▼はページ、○は肖像写真等、●は資料写真等、■は解説等のテキストの始まりをそれぞれ表しています。

▼表紙

○肖像写真1

長谷川海太郎 昭和10年 邸宅の書齋で

▼表紙裏

■ごあいさつ

小説家、翻訳家として大正末期から昭和初期にかけて活躍した三人の作家、林不忘、牧逸馬、谷譲次は同一人物です。しかし、それぞれ強烈な個性をもち、異色の作品を発表しました。そして、十年に満たない作家活動の大半を鎌倉で行ない、三十五歳で夭折しました。

林不忘は独眼隻手の怪剣士丹下左膳を描き、不朽の名作として今なお読みつがれています。牧逸馬はミステリーをはじめとして翻訳、通俗小説さらに実話読物と幅広く書きました。なかでもグローバルな視点に立った世界怪奇実話は、今もって新鮮さを保っています。

谷譲次は滞米体験を素材にした〈めぐりけんじゃっぶ〉ものを書き、その社会批評は国際化が進む現在、傾聴に値するものといえます。

今回の特別展は、時代を先取りし、一足早く生きた一人三人の作家を偲びその生涯と文学を紹介します。

なお、開催にあたり、貴重な資料をご出品、ならびにご協力いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

鎌倉文学館

▼1 ページ

○肖像写真2

自宅の車庫で 昭和4年頃

▼2 ページ

●資料写真1

図書『一人三人全集(1) 新しき天』牧逸馬 昭和8年 新潮社

●資料写真2

図書『一人三人全集（10）丹下左膳 日光の巻』林不忘 昭和9年 新潮社

●資料写真3

図書『一人三人全集（16）浴槽の花嫁』谷譲次 昭和10年 新潮社

●資料写真4

図書『一人三人全集』内容見本

▼3ページ

●資料写真5

絵画 アムステルダム風景画 作者未詳

挿絵として使われたようであるが、掲載誌名は未詳 特派員としてヨーロッパに赴いた際、入手したものと思われる

▼4～8ページ

■長谷川海太郎アルバム

佐渡から函館へ

大海や佐渡の島に生れたり

たをたをと波ただよへる只中に生れし男の子名は海太郎 長谷川清

父清（のちに淑夫と改名）は佐渡の教師を経て、明治三十五年函館の北海道新聞（のちの函館新聞）の主筆となった。母由紀は和歌に造詣が深く、のちの函館短歌会の草分的な存在であった。

海太郎は、二歳の時に函館へ移り中学までここで過ごす。両親の影響を受けて早くから詩歌に親しみ、函館中学校時代は石川啄木に傾倒し、白楊詩社という文芸グループの先輩に私淑したという。感性豊かな海太郎であったが、行動派でもあり、卒業直前のストライキ事件によって自ら退校した。

アメリカへ

文才に恵まれたうえに語学力に優れていた海太郎は、港町函館の風土的影響を受け、自由への夢をはぐくみアメリカをめざした。滞米中はオベリン大学等に籍を置き、コックや学僕などの職につきながら勉強した。アメリカの自由な空気を吸うと同時に、その社会の明暗をつぶさに見聞したという。この体験は、合理的個人主義的な社会批評眼を培い、後年、〈めりけんじゃっぶ〉もののなかに結実した。

横^{はま}浜を出るときや涙で出たが今じゃテキサス大地主

谷譲次の代表作「テキサス無宿」の一節である。後年、海太郎はアメリカ在住の日系人の社会とその姿を描いた〈めりけんじゃっぶ〉ものを書いた。「テキサス無宿」の登場人物ジョウジ・テネイは、まさに海太郎を投影させたものという。

大正十三年に帰国した海太郎は、松本泰、恵子夫妻が主催する「英語研究会」に出席し

た。そこで、英語と英文学に興味を持ち、翻訳家を志していた香取和子と出会い、十五年に結婚する。

よき伴侶を得、海太郎は昭和二年頃までの間、創作ものと並行して積極的に翻訳ものを発表した。

ヨーロッパ一周旅行

作家活動が軌道にのった海太郎は、昭和三年三月から四年六月まで中央公論社の特派員としてヨーロッパ各地を歴訪した。その旅行記が昭和三年八月から四年七月まで「中央公論」に連載された「踊る地平線」である。海太郎の外国旅券下附願という資料によればシベリア鉄道を経由して、イギリス、フランス、ドイツ、スペイン、ポルトガル、イタリア、チェコスロバキア、オーストリア、ポーランド、スイス、ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーを訪問する計画であったという。

海太郎はヨーロッパから帰国すると、帝国ホテルの一室を書斎として使用した。そして、このホテルを作品の舞台として「暁の獵人」や「明日の蜃気楼」のなかで描いている。

○肖像写真3 1歳の時

○肖像写真4 3、4歳の時

○肖像写真5 北海道庁函館中学校の頃 先輩と 左、海太郎 大正2、3年頃

○肖像写真6

アメリカに向かう船上で 大正7年

○肖像写真7

アメリカで コック姿の海太郎 大正9年

○肖像写真8

香取和子と 大正13年頃

○肖像写真9

中央公論社特派員として渡欧する夫妻 昭和3年

○肖像写真10

世界初の旅客機でドーバー海峡を渡る夫妻 昭和3年

○肖像写真11

ロンドンで 昭和3年

○肖像写真12

帝国ホテルで 右から一人おいて海太郎、旧ソ連のバレリーナ（氏名未詳）、和子夫人
昭和4年

○肖像写真13

帝国ホテルで 来日したヤンキースのホームラン王、ベーブ・ルースと 右から海太郎、ルース夫人、ルース、松井翠声（漫談家・俳優） 昭和9年

▼ 9 ページ

■ 略歴・主要作品紹介

明治 33 年 1 月 16 日、新潟県佐渡郡に生まれる。本名長谷川海太郎。四男一女の長男で、弟に湊次郎（画家）、濬（ロシア文学者）、四郎（作家）がいる。

明治 35 年 2 歳 函館に移住。

明治 40 年 7 歳 弥生尋常小学校（現、函館市立弥生小学校）に入学。

大正 2 年 13 歳 北海道庁立函館中学校（現、北海道函館中部高等学校）に入学。

大正 6 年 17 歳 卒業の直前、ストライキ事件によって自ら退校。上京する。

大正 7 年 18 歳 単身渡米。オベリン大学、オハイオノーザン大学に籍をおき、コック、学僕など各種の職業につきながら勉学。

大正 13 年 24 歳 暮に帰国。松本泰主宰の「探偵文芸」に参加し、「新青年」主筆の森下雨村と知り合う。

大正 14 年 25 歳 森下雨村のすすめにより〈めりけんじゃっぷ〉ものを「新青年」に発表。以後、林不忘、牧逸馬、谷譲次という三つの筆名を駆使して執筆する。「釘抜藤吉捕物覚書」（連作）を「探偵文芸」に連載（林）。ジイ・ジョイス著「意外」を翻訳し「新青年」に発表（牧）。「ヤング東郷」を「新青年」に発表（谷）。

大正 15 年 26 歳 香取和子と結婚。鎌倉材木座の向福寺の一室を借りて住む。「新青年」に発表した〈めりけんじゃっぷ〉ものを中央公論社の嶋中雄作に認められ「中央公論」にも執筆する。「釘抜藤吉捕物覚書」（連作）を「苦楽」に発表（林）。「こん・げいむ（当世昼夜用心記）」を「中央公論」、「テキサス無宿」を「新青年」に発表（谷）。

昭和 2 年 27 歳 「新版大岡政談」を「東京日日新聞」に連載（林）。「もだん・でかめろん」を「中央公論」に連載。「めりけんじゃっぷ商売往来」を「新青年」に連載（谷）。

昭和 3 年 28 歳 中央公論社の特派員として一年三カ月にわたるヨーロッパ周旅行に夫妻で出かける。「早耳三次捕物聞書」（連作）を「講談雑誌」に発表（林）。「踊る地平線」を「中央公論」に発表（谷）。「新版大岡政談」を歌舞伎が大阪浪花座、新声劇が角座でそれぞれ上演。また、東亜キネマ等で映画化される。

昭和 4 年 29 歳 帰国。しばらく帝国ホテルに滞在したが、鎌倉町（現、鎌倉市）材木座に移り、次いで笹目に転居。「世界怪奇実話」を「中央公論」に連載（牧）。

昭和 5 年 30 歳 毎日新聞の専属となる。「この太陽」を「東京日日新聞」に連載（牧）。

昭和 6 年 31 歳 「相思樹」を「主婦之友」に連載（牧）。戯曲「安重根」を「中央公論」に発表（谷）。

昭和 7 年 32 歳 「煩惱秘文書」を「オール読物」に連載（林）。「呆れたものですわね」を「主婦之友」に連載（牧）。

昭和 8 年 33 歳 毎日新聞の専属を退く。「講談丹下左膳」を「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」に連載（林）。「新しき天」を「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」に連載（牧）。

昭和 9 年 34 歳 雪ノ下の新居、通称あかがね御殿に移る。「新講談丹下左膳」を「読売新聞」に連載（林）。「暁の獵人」を「大阪朝日新聞」に連載（牧）。

昭和 10 年 35 歳 「双心臓」を「報知新聞」に発表（牧）。6 月 29 日、未完成の新邸で

急死。戒名は「慧照院不忘日海居士」。墓所は大町の妙本寺にある。

※林不忘は林、牧逸馬は牧、谷譲次は谷に省略した。

※「一人三人全集」（河出書房新社版）等を参照した。

▼ 10、11 ページ

■ 林不忘の作品

昭和二年に「新版大岡政談」（「丹下左膳—乾雲坤竜の巻」）を「東京日日新聞」に連載。脇役として登場した独眼隻手^{せきしゅ}の怪剣士、丹下左膳が人気を博した。昭和五年に「文芸倶楽部」に発表した「続大岡政談」（「魔像」）には丹下左膳は登場しない。しかし、読者の圧倒的な支持を得、ついに丹下左膳が主人公となり、昭和八年に「講談丹下左膳」（「丹下左膳—こけ猿の巻」）を「大阪毎日新聞」等に連載。次いで昭和九年「新講談丹下左膳」（丹下左膳—日光の巻）を「読売新聞」に連載した。庶民的共感をあつめた丹下左膳は物語がすすむにつれて、ニヒルな剣士から思いやりのある人物に改まってゆくのも興味深い。

なお、この連作は大河内伝次郎の主演作をはじめとして何度も映画化された。やがて映像のイメージが先行して後を追うかたちで原作が読みつがれ、不朽の名作となっている。

時代小説の連作はほかに「釘抜藤吉捕物覚書」と「早耳三次捕物聞書」がある。林の描く時代小説は、いずれも特異な性格をもち、新風を吹き込んだ作品として注目に値する。

● 資料写真 6

原稿「江戸巷塵譜」 「婦人公論」昭和5年10月号掲載

● 資料写真 7

原稿「講談丹下左膳」 「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」昭和8年6～11月掲載

● 資料写真 8

原稿「北斎と梅寿」（未発表原稿）

● 資料写真 9

図書『丹下左膳』昭和10年 新潮社

▼ 12、13 ページ

■ 牧逸馬の作品

「中央公論」の嶋中雄作（のちの社長）に認められ、同誌に執筆、さらに中央公論社の特派員としてヨーロッパ一周旅行をする機会を得た。旅の途中、ロンドンで膨大な古書を収集し、これらの資料を自在に操り「世界怪奇実話」を「中央公論」足掛け四年にわたり連載した。鋭利な国際感覚をもつ牧が、世界的な視野にたって書いたノンフィクションで、この分野を切り開いた記念碑的作品であり、現在でも新鮮さを保っている。

しかし、牧の仕事のなかで、当時もっとも話題をよんだのは通俗小説である。風俗や人間像に斬新なとらえ方をした「この太陽」「相思樹」「地上の星座」などの作品を次々に新聞や雑誌、殊に婦人雑誌に連載して読者を沸かせ、花形作家をしての地位を得た。

そのほか、卓越した語学力を生かして、海外のミステリーの短篇等を「新青年」に翻訳、長篇では「バッド・ガール」「グランドホテル」を翻訳した。ミステリー作品としては神

秘と幻想に満ちた「第七の天」「白仙境」、絶筆となった「七時〇三分」がある。ユーモア作品としては『ヴェランダの椅子』『紅茶と葉巻』に収められた数々の短篇がある。

●資料写真 10

原稿「双心臓」 「報知新聞」昭和10年1月掲載

○肖像写真 14

執筆中の海太郎 笹目の家で

●資料写真 11

図書『世界怪奇実話全集1 浴槽の花嫁』昭和5年 中央公論社

●資料写真 12

原稿「暁の獵人」 「大阪朝日新聞」昭和9年8～12月掲載

●資料写真 13

図書『暁の獵人』昭和10年 新潮社

▼14、15ページ

■谷譲次の作品

作家生活の出発点となったのは谷譲次のペンネームで「新青年」に発表した〈めりけんじゃっぷ〉ものである。「テキサス無宿」「めりけんじゃっぷ商売往来」「もだん・でかめろん」は、七年間の滞米中に見聞、体験した事柄を素材に、虚実取り混ぜて描いた軽妙、痛快な読物である。一度英語で考えてそれを日本語に訳して書いたと伝え、いずれも独特な文体でまとめられている。

そのほか、ヨーロッパ一周旅行をもとに書いた「踊る地平線」は好奇心にあふれた海外旅行記である。翻訳では「猶太人ジュス」など、戯曲では「安重根」がある。翻訳ものでは「新巖窟王」があるが、谷の死によって未完になるところを村瀬東一が引き継ぎ完成させた。

時代小説の分野では伝奇小説の新時代的なよみがえりを策し、通俗小説では家庭恋愛物に当時の風俗や流行を野心的に取りこみ、“めりけん・じゃっぷ”ものでは、一種のモダニズム文学としてあたかもモダン・ジャズを聞いているような独特な文体を創造し、実話ものでは、“事実は小説より奇”であることを人間的興味のなかで浮彫りした。その意味では彼は戦後の状況を二十年いや三十年先取りした作家だったのである。(尾崎秀樹 おざきほつき 富士見書房版「丹下左膳」解説より)

●資料写真 14

原稿「大陸」 「中央公論」昭和5年1～5月号

●資料写真 15

原稿「貞操のアメリカ化を排す」 「婦人公論」昭和5年10月号掲載

●資料写真 16

図書『踊る地平線』昭和4年 中央公論社

●資料写真 17

原稿 戯曲「安重根」 「中央公論」昭和6年4月号掲載

▼16、17ページ

■映画になった作品

時代小説や通俗小説が映画化され、なかでも作品からぬけ出して神話的ヒーローとなったのが丹下左膳である。昭和二年から「東京日日新聞」に連載された「新版大岡政談」は、連載中に芝居や映画、ラジオ・ドラマになった。とくに映画では東亜、マキノ、日活の三社競作となり、昭和三年五月に封切られた。日活が伊藤大輔監督の巧みな脚色と演出、丹下左膳役の大河内伝次郎の演技により他社作品を圧倒した。当時は無声映画で、この作品を人気弁士が競って語ったという。その後、トーキーとなり「丹下左膳」のシリーズは何度も映画化されている。

○スチール写真1

「丹下左膳」 大河内伝次郎（丹下左膳・大岡越前守役） 大映 昭和28年

○スチール写真2

「刃傷未遂」^{にんじょうみすい} 上、柳永二郎（吉良上野介役） 下、長谷川一夫（岡部美濃守役）
大映 昭和32年

○スチール写真3

「丹下左膳」 阪東妻三郎（丹下左膳役） 松竹 昭和27年

○スチール写真4

「新しき天」 右から岡村文子・山本富士子・南田洋子 大映 昭和29年

▼18、19、20ページ

■鎌倉と林不忘

大正十五年香取和子と結婚し、鎌倉材木座の向福寺の一室を借りて、新婚生活をはじめた。昭和四年に外遊から帰り、一時帝国ホテルに滞在するが、再び材木座に戻り、やがて笹目に転居した。その後雪ノ下に邸宅を新築、未完成のまま入居し、昭和十年六月二十九日にここで急死した。

海太郎は十年に満たない作家活動の大半を鎌倉で行った。

■作品のなかの鎌倉

うす暗い軒灯ぐら けんとう ひかの光りベルで、呼鈴えきをさがしていると、駅のから乗って来たタクシきの運転手うんでんしゅが、手荷物てにもつのバスケットもとスーツケースきを持って、うしろきに来ていた。

『開あきませんか。誰だれもいねえのかな。』運転手うんでんしゅは、ぞんざいくちな口ざいもくざをなかをがきいた。『材木座、中河原たし一九八、と。確こかに此家こだがなあー。』

鎌倉かまくらの夜よるのしずけさが、ほっそりした美波子みはこの肩かたをつか掴むように、覆おおいかぶさきって、かの女じよは、とりつく島しまもないようなこころ細ほそさと、恐きょうふ怖に似た気きもちが、こみあ上げて来たき。

※中央公論社昭和七年刊「相思樹」(牧逸馬)所収「影と日向と」^{かげ ひなた}から抜粋

■林不忘の邸宅

鶴岡八幡宮の裏(現、雪ノ下)の傾斜地に、壮大な邸宅を建てた。父の怒りを買って当初の計画の三分の一に縮小したが、それでも冷暖房を完備し、建物を京都から職人を呼んで造らせるなど、スケールの大きさには目を見張るものがあったという。

○肖像写真 15

自宅でゴルフを練習する海太郎 昭和9、10年頃

○肖像写真 16

海太郎夫妻 鎌倉大仏の前で

●風景写真 1

建設中の邸宅遠景 昭和9年頃

●風景写真 2

邸宅全景 左側の蔵は現存する 昭和9、10年頃

●風景写真 3

1階ホール 邸内は全室冷暖房が完備していた

○肖像写真 17

邸宅の書齋で 昭和10年

●風景写真 4

台所 当時としては珍しく、電気冷蔵庫が捉えられていた

●風景写真 5

大理石の風呂場

▼21ページ

■主要著書目録

- ・書名・著者名・発行年・出版者を記し、年代順に配列した。
- ・著者名は、林不忘を林、牧逸馬を牧、谷譲次を谷に省略した。
- ・発行年は、昭和を昭、平成を平、さらに年を省略した。

*単行書

新版大岡政談 (林) 昭3 平凡社

テキサス無宿 (谷) 昭4 改造社

もだん・でかめろん (谷) 昭4 改造社

踊る地平線 (谷) 昭4 中央公論社

モダン読本 (谷) 昭5 天人社

この太陽 (牧) 昭5 中央公論社

水晶の座 (牧) 昭5 新潮社

浴槽の花嫁 (牧) 昭5 中央公論社(世界怪奇実話全集1)

運命のSOS (牧) 昭6 中央公論社 (世界怪奇実話全集2)

海のない港 (牧) 昭6 中央公論社

戦争とは何だ (牧) 昭7 中央公論社 (世界怪奇実話全集3)

相思樹 (牧) 昭7 中央公論社

暁の獵人 (牧) 昭10 新潮社

丹下左膳 (合本) (林) 昭10 新潮社

双心臓 (牧) 昭10 新潮社

新巖窟王 (谷) 昭11 新潮社

安重根 (谷) 平元 五望書房

翻訳書

猶太人ジュス ホイヒトワンダー著 (谷) 昭5 中央公論社

人われを大工と呼ぶ アプトン・シンクレア著 (谷) 昭5 新潮社

バッド・ガール ヴィニア・デルマ著 (牧) 昭6 中央公論社

グランド・ホテル ヴィッキ・バウム著 (牧) 昭7 中央公論社

*全集

一人三人全集 全十六巻 長谷川海太郎著 昭8~10 新潮社

1 牧篇 新しき天 相思樹

2 牧篇 この太陽 愛すべく

3 牧篇 七つの海

4 牧篇 地上の星座

5 牧篇 心の波止場 愛の防風林 父の憂愁

6 牧篇 海のない港 呆れたものですわね 試験別居 第七の天

7 牧篇 明日の蜃気楼 (短篇集)

8 林篇 大岡政談

9 林篇 丹下左膳 (こけ猿の巻)

10 林篇 丹下左膳 (日光の巻)

11 林篇 魔像 煩悩秘文書 早耳三次捕物聞書

12 林篇 巷説享保図絵 藤吉捕物帖

13 谷篇 テキサス無宿 めりけん一代男 春

14 谷篇 もだん・でかめろん

15 谷篇 踊る地平線

16 谷篇 浴槽の花嫁 運命のSOS

一人三人全集 全六巻 昭44~45 河出書房新社

1 釘抜藤吉捕物覚書 (時代捕物) (林)

2 丹下左膳 (こけ猿の巻) (時代小説) (林)

3 テキサス無宿 (めりけんじゃっぶ) (谷)

4 踊る地平線 (世界旅行記) (谷)

5 浴槽の花嫁 (世界怪奇実話) (牧)

6 七時〇三分 (ミステリー) (牧)

●資料写真 18

図書『この太陽』昭和5年 中央公論社

▼22、23ページ

●資料写真 19

表紙（挿絵）原画 掲載図書未詳 志村立美画

●資料写真 20

扉（挿絵）原画 掲載図書未詳 志村立美画 23ページ

■志村立美（明治四十年～昭和五十五年）

挿絵画家、日本画家。群馬県高崎市に生まれた。本名仙太郎。昭和八年「講談丹下左膳」の表紙や挿絵のほか、小島政二郎の「人妻椿」、海音寺潮五郎の「暴風の旗」などの挿絵を描いて花形画家となった。

●資料写真 21

初代丹下左膳大河内伝次郎の衣装

▼24ページ

■寄稿「昭和の幕開けと共に（三つの名前を持つ作家）」 胡桃沢耕史（作家）

▼25ページ

■主な展示品

・著書類

踊る地平線（谷）昭4 中央公論社

この太陽（牧）昭5 中央公論社

浴槽の花嫁（牧）昭5 中央公論社

暁の獵人（牧）昭10 新潮社

丹下左膳（合本）（林）昭10 新潮社

双心臓（牧）昭10 新潮社

新巖窟王（谷）昭11 新潮社

猶太人ジュス ホイヒトワンダー著（谷）昭5 中央公論社

バッド・ガール ヴィニア・デルマ著（牧）昭6 中央公論社

「一人三人全集」昭8～10 新潮社

・原稿類

「講談丹下左膳」（林・複製）「北斎と梅寿」（林）「双心臓」（牧）「暁の獵人」（牧）「大陸」（谷）「貞操のアメリカ化を耕す」（谷）「安重根」（谷）

・愛蔵品・愛用品類

・書簡類

・挿絵原画

・写真類

■協力者・出品協力者

胡桃沢耕史

志村立順

長谷川忠男

■協力機関

松竹株式会社

大映株式会社

(敬称略 五十音順)

- ・著書に関する記述については、活字等の都合により、新字体、新かなづかいを用いた。
- ・写真類、映画スチール写真等は長谷川家所蔵のものを掲載した。

文学講演会

テーマ「三つの名を持つ作家」

講師 胡桃沢耕史氏（作家）

日時 平成四年七月十日（金）

午後一時三十分～三時（会場一時）

会場 鎌倉市中央公民館ホール

先着順二百八十名 入場無料

特別展

林不忘—三つのペンネームを持つ作家—

平成四年六月十二日（金）～七月二十六日（日）

平成四年六月十二日

発行 鎌倉市教育委員会

鎌倉文学館

〒248 鎌倉市長谷一一五—三

▼裏表紙

●資料写真 22

図書『一人三人全集』全十六巻 昭和8～10年 新潮社